## (一) 大屋の養蚕の先覚者たち

但馬養蚕が衰退したままの江戸中期、大屋谷には数多の養蚕復興の先駆者が輩出した。なかでも上垣守国は但馬養蚕のみならず、欧州の蚕糸業にも影響を与えた。

### 1 上垣守国翁紀蹟碑文

蔵垣　宝幢寺
明治四十年（一九〇七）

但馬養父有村曰蔵垣安永中上垣守國為其里正以為桑生瘠土蠶不必男農家致富無出其右者年十八經信濃關東至陸奥講究種桑養蚕之方歸頒蚕子隣里郷黨至期蠶熟繭絲極美君大悦連至陸奥購蚕子年以為恒後過氣多見納屋土壌頻類陸奥梁川乃建蚕室以産蠶子佳良不下陸奥年四十八著養蠶秘録鐫献藩主賜米賞焉当時挙國以種稲為本業桑蠶目以末作其傾耳焉者極少弘嘉以来欧米諸國頻請互市廟議許之欧商米賈競購蠶子繭絲於是二者始為我國輸出大宗人争事蠶桑蠶桑之書逐日上梓而識者皆曰無有能駕養蠶秘録者明治四十年十月適為其百回忌辰養父郡長小林正義與山崎技師藤島校長諸氏謀募金設壇祭之建碑表之餘贏則擧附弧孫使之入蠶業學絞寄書曰在昔養蠶秘録之成也令祖為之序今也將建碑請銘之是豈非所謂因縁者乎余唯而不宿乃作銘銘曰

厚生之本　在衣與食　無食無衣　民何以息　神祖開國　并教蠶穡
人免凍餒　萬姓蕃殖　世降道微　好事口腹　謂蠶末作　徒務播穀
卓彼垣氏　所見特偉　踰關入奥　晨夜亹々　斯究其方　又購蠶子
歸頒郷黨　繭糸雙美　著作巻帙　秘奥詳悉　遠邇流傳　讃為第一
蓋棺世霜　海外通商　維繭與絲　輸出壇場　貨利攸阜　民人趨走
五畝樹桑　爰及原藪　蓁剪径開　年久論定　醵金以祀　綽有餘賸
孫登干黌　碑聳郊坰　積善餘慶　徵斯墳塋

従三位勲一等　服部一三篆額　正四位勲三等　桜井　勉撰文
明治四十二年十月建　正七位勲五等　吉田　庸謹書

（読下文）

但馬養父[たじまやぶ](郡)に村あり蔵垣[くらがき]という。安永中[あんえいちゅう]、上垣守国其の里正[りせい]となり、以爲[おもえ]らく桑は瘠土[せきど]に生じ、蚕は必ずしも男ならずして、農家富を致すこと、其の右に出ずる者無しと。年十八にして信濃・関東を経て陸奥[むつ]に至り、種桑養蚕の方(法)を講究す。帰りて蚕子[たね]を隣里郷党[きょうとう]に頒[わか]つ。期至れば蚕熟し、繭糸極めて美なり。君大いに悦[よろこ]ぶ。連[つづ]きて陸奥に至り蚕子を購[あがな]い、年ごろ以て恒[つね]となす。後[のち]、気多(郡)を過ぎ、納屋を見るに、土嬢頗[すこぶ]る陸奥の梁川[やながわ]に類す。乃ち蚕室を建て以て蚕子を産するに、佳良なること陸奥を下らず。年四十八。養蚕秘録を著[あらわ]し、藩主に鐫献[せんけん]す。米を賜[たまわ]いここに賞す。当時国を挙げて種稲を

以て本業と為[な]し、桑蚕[そうさん]は末作[まっさく]を以て目[もく]し、其の耳を傾ける者極めて少なし。弘(火)嘉(永)以来、欧米諸国頻[しき]りに互市を請[こ]い、廟議之を許す。欧商米賈[おうしょうべいこ]競いて蚕子繭糸[たねけんし]を購い、是に於いて二者始めて我が国輸出の大宗と為る。人争いて蚕桑を事とし、蚕桑の書日を逐[お]いて上梓[じょうし]す。而れども識者皆曰く、能[よ]く養蚕秘録を駕[が]する者有る無しと。明治四十年十月は、適々[たまたま]其の百回の忌辰[きしん]と為[た]り。養父郡長小林正義、山崎技師、藤島校長諸氏と謀[はか]り、募金して壇を設け之を祭り碑を建てて之を表し、余贏[よえい]は即[すなわ]ち挙げて弧孫[こそん]に附し、之をして蚕業学校に入らしむ。書を寄せて曰く、在昔[ざいせき]養蚕秘録の成るや、令祖[れいそ]之が為に序せり。今や将[まさ]に碑を建てんとするに、之に銘せんことを請う。是[これ]豈[あに]所謂[いわゆる]因縁[いんねん]なる者に非[あら]ずやと。余、唯々として宿せず。乃ち銘を作る。銘に曰く。

厚生[こうせい]の本[もと]は　衣と食とに在[あ]り、食無く衣無ければ　民何を以てか息はん。神祖国を開き　併せて蚕穡[さんしょく]を教え、人、凍餒[とうう]を免[まぬが]れ、万姓蕃殖す。世降りて道微[かす]れ、好んで口腹を事とし、蚕を末作[まっさく]と謂[い]い、徒[いたずら]に播穀[はこく]に務む。卓[すぐ]れたり彼の(上)垣氏所見特[とく]に偉[い]なり。関(東)を踰[こ]え奥(羽)に入り、晨夜[しんや]亹々[びび]として斯れ其の方を究め、又蚕子を購い　帰りて郷党[りょうとう]に頒[わか]つ、繭糸雙[ふた]つながら美なり。著作は巻帙[かんちっ]を為し、秘奥[ひおう]を詳悉[しょうしつ]にして、遠邇[おんじ]に流伝[るでん]し、讃めて第一と為[な]す。棺[ひつぎ]を蓋[ふた]して世霜[せそう]、海外通商。維[こ]れ繭と糸と　輸出の壇場[だんば]、貨利攸[ゆた]かに阜[さか]んなり。民人趨走[すうそう]し、五畝には桑を樹う。爰[ここ]において原藪[げんそう]に及び、蓁[しん]は剪[き]り径[みち]を開く。年久しくして論定まり、醵金して以て祀[まつ]るに、綽[しゃく]として余賸[よしょう]あり、孫は干黌[かんこう](学校)に登り、碑は郊坰[こうけい]に聳ゆ、積善の余慶は、斯の墳塋[ふんえい]に徴すべし。

## 2　上垣守国墓標碑文

蔵垣　上垣家華地
文政四年（一八二一）

君性上垣諱守国称伊兵衛但馬養父郡蔵垣村人家世業農至守国三世守国専用力於農桑以陸奥本場之蚕種甲於本邦不遠千里往来普販諸国中貨売日多於一日既而巡歴乎諸州察其見聞之実否試其殖養之得失刻苦百端其術益矣著書名曰養蚕秘録桑蚕之権與殖養之方法無不該挙人以為良法也書成而献干官官感其篤志賜米若干賞焉嗚呼守国畎畝之人未曾学問然其志可謂勤矣文化五年秋八月十九日病終間家年五十六有二弟季早光仲能助其志謀事服労同居十数年室家和睦人不得間然友干之情至哉子守永能継考之業不敢失墜家口数十可謂栄也銘曰。

労心同力業昌功成秩々孫子長受其栄

文政四年辛巳春二月　　橋本広春山撰
男上垣守永謹建

（読み下し文）

君の姓は上垣、諱は守国伊兵衛と称す。但馬養父郡蔵垣の人なり。家は世々農を業とし、守国に至って三なり。守国は専ら農桑に力を用い、陸奥の本場の蚕種を以て、本邦に於て甲とし、千里の往来を遠しとせずあまねく諸国中に販し、貨売日一日に於て多し。既にして諸州を巡歴してその見聞の実否を察し、その殖産の得失を試み、刻苦百端、其術益々熟す。著書名づけて養蚕秘録と日う。桑蚕の権与たり。殖産の方法挙げざるは無し、人以て良法と為すなり。書成り而して官に献ず。官その篤志に感じて米若干を賜って賞す。嗚呼、守国は畎畝の人にして未だかつて学問せず。然るに其志勤むると云う可き也。文化三年秋八月一九日病みて家に終る。年五十六。二弟季早光仲有り。能くその志を助けて事を謀り労に服す。同居十数年、室家と和睦し、人間然することを得ず。友于の情至るなり。子守永よく父の業を継ぎ、あえて失墜せず、家口数十、栄えると謂う可きなり。銘に曰く、心を労し勤め力む。業昌え功成る秩々の孫子長く其の栄を受く。

◇上垣伊兵衛守国。宝暦三年（一七五三）生まれ。文化五年（一八〇八）没。明和七年（一七七〇）、奥州・福島種を導入・普及する。その後、弟宇右衛門に奥州行を専務させ、文化期まで四十年余、導入を継続する。寛政九年（一七九七）に気多郡納屋に蚕室仙栄堂を設けて蚕種を製して頒布する。享和三年（一八〇三）に『養蚕秘録』を刊行。蚕書中随一とされ、文政十二年（一八二八）シーボルトが持ち帰り、嘉永元年（一八四八）オランダ王室通訳官ホフマンによって仏訳される。

## 3 養蚕記

寛政元年（一七八九）六月

**この文書は、福島県梁川町伏黒村佐藤与惣左衛門家文書「蚕養記」から但馬伊兵衛分を抜粋、奥州種購買記録を筆者が蒐集したものである。**

（前略）

閏六月十六日（寛政元年）

一　十五　　但馬　伊兵衛殿

一　百三まい

金九両永五十

酉閏六月十六日渡し

内金拾両壱分永七十五文

閏六月十七日請取

差引残　金壱分永四十五文

戌六月廿四日返し済

（後略）

## 4 正垣半兵衛（墓碑）

糸原田野　正垣家墓地

法光院隆本道覚居士

翁姓正垣諱命郷通称半兵衛其先甚兵衛其出自当郡正垣夷山野発余田田勉稼穡遂家居焉蓋当村開闢乎爾后連綿七代而及翁翁同胞九人翁其季弟也兄二人漸次治家皆涼徳家道頗衰及翁治家毎事厳密又克脩祖先徳励耕穡養蚕翼翼以齊家自年二十五此年遊陸奥求蚕種帰弘之国中其蚕竒而當四方受其賜石城矣徴之賜俵三口被免帯刀令拝領御紋之上下命用達役翁名声益顕亦東山下発余田田三千歩家道益栄通東奥二十八年翁年五十三也巳而歎曰凡事不可満恐有亢龍之悔哉断熄通東奥唯楽只翁為人恭謹是以所允人嘗娶栃尾豊昌之女無子有庶子介義以為嗣翁生明和庚寅正月一五日享年七十八弘化丁未八月二十四日病卒葬之先塋之地也

孝子介義拝泣建之

妻　山路村里生栃尾太郎兵衛（娘）

天明癸卯八月十七日生（天明三年　一七八三年）

天保甲午九月廿日病死享年五十有二

（読下し文）

翁の姓は正垣、諱[いなみ]を郷[さと]の通称半兵衛と命ず。其の光（祖）甚兵衛当郡正垣（邑）より出て夷[えびす]の山野の開田に発す。稼穡[かしょく]に勉め遂に家居[すまい]とす、焉[いずく]んぞ蓋[けだ]

し当村を開闢[かいびゃく]乎[か]。爾後[じご]連綿七代にて翁に及ぶ、翁の同朋[はらから]九人、翁は其の末弟也。兄二人漸次家を治む、皆涼徳で家道頗[すこぶ]る衰える、翁に及び家を治めて毎事厳密にし、又祖先の徳を克く脩め、耕穡[こうしょく]養蚕に励み、翼々[よくよく]以[も]って家を齊[ととの]う。歳二十五、此の年より蚕種を求めて陸奥に遊ぶ、帰りて国中に其の蚕を弘め、竒[めずらし]くも四方に当り其の賜[たまもの]を受ける。(出)石城(君)候徴しての賜は俵三口(三人扶持)、帯刀を免じられ、御紋付上下[かみしも]を拝領し、御用達役を命じられる。翁が名声益々顕[あらわ]れ、亦、東山下に三千歩を開田し、家道ますます栄えり。東奥に通うこと二十八年、翁の年五十三也。已[すで]にして歎じて曰[いわ]く、「凡そ事は満たすべからず、亢龍[こうりゅう]の悔[くい]有るを恐る哉」東奥通いを断熄[だんそく]して唯楽す、只翁の為したるを人(々)は恭謹[きょうきん]す、是[こ]れ(在)所を以って允[まこと]の人なり。嘗[か]って栃尾豊昌の女[むすめ]を娶[めと]るも子が無く、庶子[しょし]有り介義を以って嗣[つぐ]と為す。翁は明和庚寅[かのえとら](七年)に生れ、享年七十八才、弘化丁未[ひのとひつじ](四年)八月二十四日に病卒す。葬[とむら]いの先は先塋[せんえい]の地なり。

◇正垣半兵衛は明和七年(一七七〇)生。弘化四年(一八四七)没

## 5　正垣半兵衛帯刀等御免状

文政二年(一八一九)ヵ

**大屋富士裾野の三町歩を開拓した功績で、文政二年(一八一九)、出石藩より帯刀を許され、三人扶持(一日一升五合)を下され、改めて御用達を命じられた書状。半兵衛は代々糸原村庄屋を務めた。**

養父郡糸原村庄屋
半兵衛

其方儀御勝手方
御用向格別ニ致出情候段尤之事ニ候、依之以後
帯刀御免御用達被
仰付、御紋付御上下被成下并御扶持方三人扶持被成下候、
此上猶更出情相勤候様
存候事

閏　四月

## (二) 小倉寛一郎と盛業製糸場

### 6 小倉寛一郎略伝

『三丹蚕業郷土史』より抜粋

本籍但馬国養父郡南谷村和田小字古屋小倉寛一郎、安政六年二月二十九日生、

一明治十年六月製糸創業(座繰式)

拙家十数代以前より地方の地主として安住し、副業的に明延銅山を直営し居りしが、明治維新と共に我国経済機構大変革の結果、日本生糸も英米への輸出の途開かるるに及び、但馬特産の生糸を発達せしむる事は地方の福音であるのみならず、家業としても将来有望ならんとの見地の下に、寛一郎十九歳の春他の諫止を排して故郷古屋に独力を以って「盛業製糸場」を創設し、座繰式弐拾釜を設け、製品には牛印商標(牧場に牛の居る図)を付し、製糸場を始めたり。

一明治拾壱年木製ケンネル器械製糸に変更、舶来の方法にては優良品を得る事至難なるため、蒸気動カスチーム煮沸による器械製糸に変わらんとしたれど、当時ボイラーの新調は中々の難事なりしため、試みに水車動力に依り木製機械を据付け、二十五釜に改め、木炭を以て煮沸する事とせしが、製品は光沢悪敷、意を満たすに足らず、依って万難を排してボイラーを設置し、金属機械製糸に改造せん事を決心したり。

一明治拾四年春ボイラー据付、金属機械製糸開始、ボイラー製作に着き神戸川崎造船所に相談せしも、製造能力なしとの事故、同所にはドンキポンプのみを製作せしめ、ボイラーは兵庫県知事森岡氏の紹介状にて、東京日本橋鎌田商店(上州方面への製糸機械商)に行きたれど、同店も受注能力なく、致し方なく更に同店の紹介状を得て横須賀工廠に至り、漸くにして径三尺、長九尺、拾弐本パイプ入り、拾弐馬力の物を注文せり。(値段約九百円也)

右ボイラーは捨四年二月完成したれども、当時は汽車輸送の便なく、横須賀、神戸間は汽車便に依り、神戸にて更に和船に積替、播州飾磨港揚げとせり。神戸積替の際森岡知事及本山勧業課長(後の大阪毎日新聞社長)は親しく積送船に来乗せられ、新ボイラーを実見し、且つ大に激励せられ、飾磨、但馬間の陸送に便宜を与えんとて、長さ三尺余の白木綿に「兵庫県御用」と記入したる旗を交付されたり。

飾磨より但馬の奥地古屋村までの運搬は難中の至難事にて、往時を回顧して感慨無量なるものあり。煉瓦の如きも当時但馬にて手に入らず、明石地方より煉瓦職工を雇来り、養父郡宮本村にて焼かしめたり。

斯くて拾四年五月据付を終わり、五拾釜に増釜して運転を開始し、機械も金属製に取替、新式製糸の設備完了し、明治二十二年閉業迄継続したり。

## (三) 上垣守国百年祭

明治40年10月10日、上垣守国没後百年を記念した上垣守国百年祭が、蔵垣にある菩提寺の宝幢寺で開催された。養父郡長小林正義氏が発起人代表となり、県立蚕業学校長島盈文、県養蚕技師山崎粂蔵氏らが企画し、当日は千人をこす人々が参集した。郷土の偉人である上垣守国とその業績を偲んでいる。明治40年11月15日の『兵庫県蚕業会報』第81号（26～28ページ）から当時の様子を紹介する。

○上垣守國翁一百年祭

既報の如く去月十日、養父郡西谷村ノ内、蔵垣村なる翁の菩提寺寶幢寺にて擧行せられたり。参列者は知事代理として堀事務官補を始め、山崎縣技師、小林養父郡長、藤嶋蚕業學校長、各郡農業技手諸君、大坂朝日大坂毎日新聞記者、県立蠶業學校職員生徒、各小學校教員及生徒、各村長其他無慮一千名にして、午後一時より既定の如き順序にて祭典を擧行し、式後餅蒔き酒饌の饗應等ありを該地方に於ては稀有の盛會なりし。左に當日の祭文を掲ぐ。但し本會頭の祭詞は幹事關口宗一氏、代りて之を讀みたり。

祭　文

維時明治四十年十月十日、兵庫縣養父郡長従六位勲五等小林正義發起人を代表し、謹みて薫香を點し、故上垣守国翁の靈を祭る。嗚呼翁は、百世蚕業の師と云うべきなり。其身、已に死すと雖も、英魂は凛乎として、斯界に存す。抑も翁が當時の形勢たる幕府の盛世海内砥平文恬武熙、日も之れ足らざるの観あり。其民業の如きは、殆んど顧るに遑あらざるものの如し。然るに翁は蹶然身を南但の僻境に起し居常心を桑蚕に委子、研鑽之れ努め、規劃経営至らざるなく、或は遠く養殖の方を東奥に學び、或は上信各地に周遊して、其長短を參酌し、以て之が蘊奥を極め、廣く諸州に傳へ、優に斯業中興の租たるの偉績を揚げられしは之を斯界の寶典たる翁の遺書養蚕秘録及前後数次に於ける官の褒賞に照して明かなり。

顧ふに、翁の明敏達識なる既往一百有余年の昔時に於て、夙に蚕業の消長は邦家の命脈に関することを観取せられ、後昆をして其據る所を知らしめき如き。之を今日斯業界の趨勢に鑑み、経済上の状態に照すに、眞に千古の卓見と云わざるべからず。然るに斯くの如き翁が功績卓観の赫々たるにも拘ず、其苗裔の凋落殊に甚しく、僅に数世の孫、天地一塊肉を留むる如き、洵に悲惨の極にして、亦た見るに忍びざるなり。是に於て不肖等、之を天下同情の士に呼號し、其の賛襄を辱ふし茲に翁の一百年祭を営み、併せて遺績の表彰保存及苗裔扶助の義を完くせんと期せしに翁の遺烈の薫徹と江湖有志の厚誼とにより、本日の典を擧くるを得たるは、不肖等の竊かに感泣して措

かざる所なり。即ち翁の遺蹟は漸次回復保存の途を得べく、功績は不日建設の碑石に刻して、永遠に伴うべく、嗣子は前途の方針を定め、相當教育の途を得べく加之、翁が終生の事業とし其熱血を濺がれたる桑蠶の事業は、今や大に改良発達の實を挙げ、就中蚕種製造の如き、最も著しき進歩を見るに至れり。如斯は或は時運の然らしむるものなきにあらずと雖も亦以て翁が昔年辛苦の餘澤に由るもの尠少ならざるを信ず。

嗚呼天瀧の水は鼇々として萬古其響を改めず。翁が遺績は永く本邦の蠶界に薫徹す。不肖正義俯仰感慨低徊去る能はず。茲に滿腔の摯情を傾け、翁の前に供す。尚くは来り饗けよ。

明治四十年十月十日、故上垣守國翁百年祭を挙行せらるるに方り、兵庫縣知事従三位勲一等服部一三、謹て翁の靈に告ぐ。

惟みるに丹波但馬地方の蠶業たるや、中古既に盛名ありしと雖も、多く年所を歴て因襲の久しき。一に舊套を墨守し、復た改良を計る者なく、斯業漸く振わず。翁慨然として之を嘆き親しく奥羽を周遊して、備さに蠶桑の状況を視察し大に得る所あり。帰来焦心苦慮良種を求めて飼育の改良に盡瘁し、百折撓まず、千挫屈せず、或は蚕室を設けて飼育を試み、或は桑園を拓きて嘉苗を培ひ、蠶種を製造して廣く衆に頒ち、鋭意改善の事に従ふ。其蚕業の為にする實に至矣儘矣と謂つ可きなり。然れも猶ほ未だ以て足れりとせず、普く諸州を歴、抵して討究を怠らず、後ち自ら見聞したる所を録して養蠶秘録と名く。此書出でて以來斯業頓に革新し、世を稗益したること、洵に鮮少にあらざるなり。今や文物彬々として、各般の産業悉く勃興の機運に向ひ、蠶業の如きも亦た発達の實蹟特に著しく。即ち生絲は海外輸出品中其首位を占むるに至り。而して現に縣下に於ける重要農産物の一たり。盖し時運の然らしめたる所なりと雖も、抑も亦た翁の遺功興りてその多きに居る。近時翁を追賞すること数次に及ぶ。豈偶然ならんや。茲に翁お懿徳を欽仰し、併せて蠶業の現況を述ふ。在天の蠶尚饗。

（註・代読　兵庫県　堀事務官補）

我兵庫縣は蚕業の古國にして、既に一千年の古に於て、但馬は上絲國に丹波播磨は中絲國の班に列し、其聲名大に挙りしと雖も、世は戦國の渦中に揺乱すると共に、斬業亦衰退し、殆ど其奮跡をも止めさらんとするに至れり。然るに今より一百年前、我上垣守国翁は此僻陬の地に出て、未た交通不便にして、羈旅容易ならざる富時に於て、早く斯業の中興を以て自ら任じ、百千里を遠しとせすして、東西の先進國に歴遊し、研鑽多年帰りて自ら斯業を経営し、側ら子弟の薫陶に従事する等具さに困頓を極めたり。殊に其著書養蚕秘録三巻は、前代未聞の名論宏説として、今尚斯業の重典たり。嗚呼縣下蠶業は翁に依りて、永へに萬丈の光明を加へられたりと云ふべし。

茲に其一百年祭を挙行せらるるに當り、静に翁の偉績を思ひ、敬慕措く能はざるものあり。一言以て祭辭となす。

兵庫縣蠶業會頭正五位勲五等　岡毅。

（註・代読　兵庫県蚕業会幹事　関口宗一氏）

大屋の地たる山高く水長く老桑鬱茂別に一天地をなす。蠶界の

偉人、故上垣守國翁の出づる、蓋し偶然ならず。翁は夙に蠶業の国家経済に至大の関係あるを達観し、一意専心之れが研鑽に努め、萬苦を忍び遠く東北先進の地に學びて、之れを各地に活用す。其著養蚕秘録の如き蠶史上有数の寶典にして、當時斯業の奨励改進に興て、功益少々ならず。嗚呼翁の志業功績の偉大なる。眞に後進をして奮起せしむるに足る。不肖盈文方さに蚕業教育の任を辱くし、翁が當年の抱負と苦心惨憺たる経営を追想し、欽仰措く能はず。茲に一百年の祭典を挙げらるるに臨み、謹て翁の英靈に告ぐ。尚くは饗けよ。

兵庫縣立蠶業學校長　藤嶋盈文

水田勝之

さぞ人をおしへしきみがいさおしは
皇國のひかりふるらん

## 祭　辭

明治四十年十月十日、故上垣伊兵衛守國四代の継嗣伊之助謹で翁の靈前に白す。

翁の世にあるや蠶業の改良を唱導し、奥州本場の方法を傳へ、改良し以て人に教へしと。而して今や聖世に遭ひ、有志諸氏茲に其百年祭を執行せられ、知事閣下、郡長閣下を始めとし、多くの縉士諸氏の賞臨を忝し、且つ伊之助が為めに立身の方法を畫し、翁の志を紹がしめられんとす。之れ實に翁が在世中の余慶にあらずして何ぞや。伊之助等が幸栄何物か之に加へん。思ふて此に至れば實に感極つて、嗚覗戯欷言の出るを知らず。庶叢くは奮發勉勵一は以て翁の遺徳に酬ひ、一は以て有志諸氏の厚志に報いん事を期す。

上垣伊之助　謹言

其他祭文を朗讀せられたる氏名左の如し

八鹿警察署長　神谷五百吉
養父郡蠶種改良社員総代　岩淺豊之助
蓮光寺兼務住職權少僧正　川村智秀
光雲寺　住職
西谷村民代表者村長　時守雲山
各小学校職員総代西谷尋常高等小学校長　中村康

因に今回の祭典事務に鞅掌したる養父郡書記宇野信次郎氏の佳汁を掲けん。

上垣守國翁百年祭に

○御代において君がいさをのいちしるく
　あらはれにけりけふのみ祭り

○大屋川なかれての世ふとゝまるは
　君かこかいのをしへなりけり
　翁の遺書養蚕秘録を讀みて

○今もなほ昔なからに匂ふなり
　こがいのふみの花は残りて